

技術伝える遷宮こそ日本文化

校正業 大村 茂

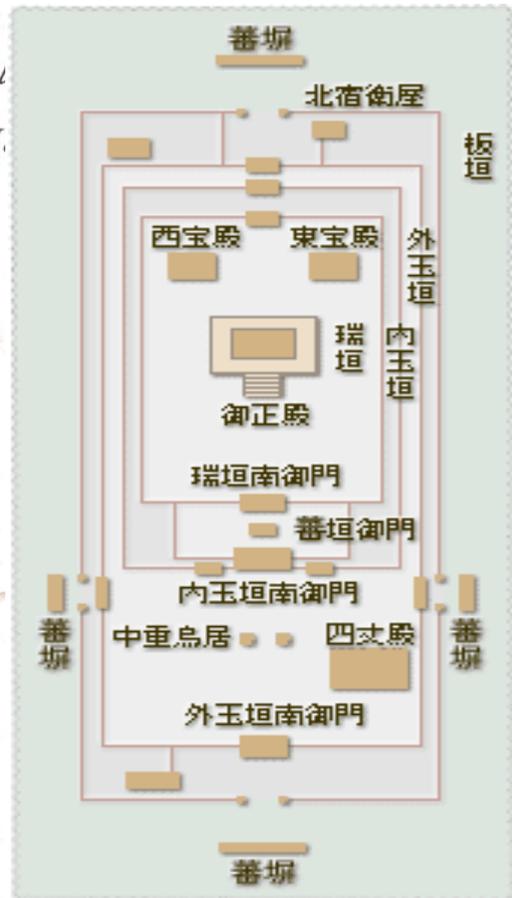
(東京都 51)

日本と西洋を比較した文化論を読んだことがある。「ヨーロッパやエジプトは石の文化で古いものを尊ぶ。日本は木の文化。何度も建て直し、古いものを大切にしない」。確かに、西洋の石造建築は耐久性がある。しかしエジプトのピラミッドにせよギリシャのパルテノン神殿にせよ、完成当時の人々が感嘆した外形や色彩は失われ、現代人は見ることができない。

それに対し日本の伊勢神宮は、建物自体は遷宮で常に新しいが、現代の私たちが目の当たりにするのも、千年以上昔の人々が見たのと変わらない唯一神明造の社殿である。何より素晴らしいのは、20年に一度の遷宮のおかげで、建築技術というソフトウエアが子々孫々、継承され続けていることだ。

「石で頑丈に造っても、この世に形あるものは必ず滅ぶ。永続できるのは、技術と思想」。これこそが古代の日本人の思いだったのではないか。

朝日新聞より



社殿の様式と配置 - 伊勢神宮のHPより

伊勢神宮を日本建築と西洋建築との違いについて説明している上記新聞記事では、建物(神殿)を構成する物質の性質と技術に視点を置いて展開している。

この点を考えてみるとその物質と技術の目的理由に大きな違いがあると思う。

西洋の、と言ってもピラミッドは為政者の墓、パルテノン神殿はギリシア神話の女神アテーナーを祀る神殿から始まりキリスト教、さらにモスクの時代に、火薬庫にと目的が変遷している。



西洋と日本との違いというより、石の建築と木の建築の持つ性格をどのように利用しているかによるのではと思うし、権力者や宗教の永遠性の効力を、自身や他者に対して重みを与えるための手段としての物質の選択だと思う。

伊勢神宮の宗教性は、海や山の自然環境を象徴化し自然崇拝を原点とした原始宗教的世界観からさらに宇宙をも含めた空間を、人々の生死も森羅万象と捉えた多神教の宗教となって民俗信仰が高度化し日本の中心的位置になったのだろう。

日本の神道(神教)は建物などの施設は重要ではなく場所が、すなわち自然空間があればそこが祈りの場となっている。

総檜の唯一神明造りの形態は、穀物倉が原点とか。平入りの切妻屋根で単純明快、20年毎の遷宮のシステムは民衆も参加し完成させる総合性の仕組みで壮大。すがすがしい感じを与える建物、それは人の気持ちを素直にさせる。キリスト教の教会や日本のお寺などの圧倒する形態や上からの説教の気配は少ない。

その拝観に際して、杉木立や檜の扉に囲まれ、その中にある正殿の金色の千木や鯉木などに光を受けた輝くその空間は、眩しいばかりの自然、森羅万象の場にふさわしいところでした。